

■ 書 評 ■

今日の神経疾患治療指針 第2版

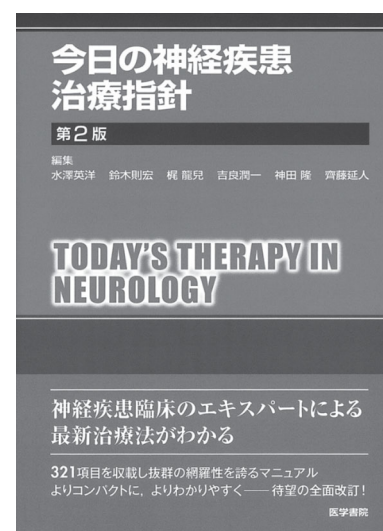
水澤英洋, 鈴木則宏, 梶 龍児
吉良潤一, 神田 隆, 齊藤延人 ● 編

国際医療福祉大学大学院長／東大名誉教授 金澤一郎

この度、医学書院から表題の本が上梓された。第2版である。だが、これがほぼ20年ぶりの改訂であることがすぐにわかる人は少ないだろう。亀山正邦・高倉公朋両先生編集による初版の序にすでに、神経学は「遺伝子レベルの研究が最も盛んな領域」であり、「高齢化によって、わが国では、神経疾患対策が強く要請されている」とある。そのほかに、この20年間に臨床や研究の内容が縦にも横にも著しく広がった。例えば、認知症が増加したうえにその鑑別診断も細分化したし、MRIをはじめとする画像診断が精緻化し、神経免疫学的病態の知見も増大した。疾患概念そのものが変わったものもある。精密になる一方の診断へのアルゴリズムも均てん化されてきた。当然、それに並行して治療法も進展した。新しい薬物や手術も開発され、治療の選択肢が多くなった。そればかりでなく、EBMの概念も定着し、いくつかの疾患について、「治療ガイドライン」も学会などの責任で作成されてきた。また、20年前にはそれこそ「夢物語」でしかなかった神経変性疾患の根本的治療も、遺伝子治療や細胞治療など

によって「もしかしたら」と思わせるような時代になったことを忘れてはならない。

これほどの大きな進歩が、ものすごいスピードで進行している神経学領域での治療法の教科書的書籍の改訂に際して、東京医科歯科大学大学院脳神経病態学・水澤英洋主任教授をはじめとする6名の編集者のご苦労は並大抵ではなかったであろう。妙なことを言うが、取り上げない項目を決めるには、新幹線のように疾走する列車から飛び降りるような勇氣がいるからである。改訂されたことがわかる点を挙げると、この20年間の臨床知見や画像知見を凝集させた「症候と鑑別診断」にページを割いていること、「治療方針」はガイドラインに沿って非常に具体的に記載されていること、薬物の商品名と一般名の対応表などの気配りが随所にあること、などであろうか。取り上げられた項目を見ると、神経内科以外に、脳神経外科、整形外科、小児神経科、神経耳科、神経眼科、など、関連診療科に関わる項目も豊富にあって非常に実用的である。これだけの内容を357名の執筆者が分担して書き上げたことを考えると、



これ以上の内容を望むのは気の毒になるが、あえて注文をつけることにしよう。

1つは心療内科的あるいは精神科的な項目がもう少しまとまってあってもよかったのではないか。例えば「不安」に対する専門家の立場からのコメントや処方例が載っていると心強だろう。また、個人的なことで気が引けるが、私が苦しんだ腰椎椎間関節狭窄症の項目を立てて、プロスタグランジン製剤による治療を紹介してくれてもよかったかと思う。無論、こんな注文にいちいち応えていたらきりがないが、患者の心理だと許して欲しい。いずれにせよ、身近に1冊備えるべき必携の書である。それにしても、改訂までの20年はいかにも長すぎる。今後は、せめて5年に縮めてほしいとお願いしておきたい。

A5 頁1,136 2013年
定価 15,750円
(本体15,000円＋税5%)
[ISBN978-4-260-01621-6]

医学書院刊